

われた。

術後2例共第1病日は排尿の量, 性状共に異常なく, 第2病日より無尿の状態を呈し, 内科的治療で奏効せず, 人工腎臓を使用した, 1例は8日目に死亡。他の1例も, なお治療中で, 本症の治療の困難性を物語っており, 治療よりその予防に万全を期さなくてはならぬことを痛感している。

## 27) 麻酔と気管の横径

国立ガンセンター 水口 公信

小児麻酔では喉頭, 気管の横径は気管内チューブを選択する上に重要であり, 現在まで多くの報告がある。しかし成人, 老人のそれは少ない。喉頭造影および頸部単純撮影から気管内チューブの太さを固定すべき位置について検討した。

その結果意識下にバルサルバ, 呼吸停止に気管に膨大部からみられ, しかし伸展性を有する。調節呼吸下では気管膨大部は支持点となつてそれ以下の気管が拡大, 縮小がみられた。したがつてこの部分にカフを固定すべきであり, そのためには気管計測の結果, 声帯から2cm深く入つた部分でカフをふくらませることがよいとわかつた。気管の太さは輪状軟骨に包まれた軟骨部分の横径がもつとも狭いから, この値がチューブの太さを決定する因子とすべきである。

## 28) 高圧酸素療法の経験

千葉労災病院 吉岡 宏三

本年1月より10月末まで千葉労災病院において施行した高圧酸素療法の症例は, 21症例, 計189回である。加圧は最短5分から30分以上かけて1.0気圧ないし2.0気圧加圧, 減圧にはとくに注意して徐々に減圧する方法をとつている。21症例の中から, 潜函病1例, 肺性心1例, 心筋硬塞症, イレウス各1例, CO中毒症2例の経過を簡単に報告した。

## 29) 頭蓋内血腫に対する開頭術の経験

上都賀病院

○新島昭二, 大塚教雄, 大河原邦夫

過去2年6カ月に7例の頭蓋内血腫の手術を行なう機会を得たので, その経験を報告する。

症例1. 26才, 男。症例2. 27才, 男。症例3. 17才, 男はいずれも側頭部, あるいは頭頂側頭部に発生した硬膜外血腫で外傷後3時間, 36時間, 10時間に開頭術を行ない全治した。症例4. 2才男, 一

見軽症に見えながら左側頭部に大きい血腫を有し, 受傷7日目に手術, 全治した。症例5. 41才, 女は上矢状洞に穿う硬膜外血腫で, 10日後に手術し全治した。症例6. 51才, 男は受傷時より昏睡, 両側急性硬膜下血腫でただちに手術を行なつたが, 翌日死亡した。症例7. 16才, 男は左側頭部の硬膜上血腫で受傷5日後手術し治癒した。

頭蓋内血腫は必ずしも定型的症状を示さないから, 脳血管写などにより早期に診断を確実にし, 時期を失せず手術すべきである。

## 30) 当院における早期胃癌

長野県立須坂病院 森川不二男, 熊谷信夫,  
○菅谷健彦, 島 毅

胃癌の手術的永久治癒率を100%に近づけるには, 早期発見が最も重要である。

私達は昭和38~41年の間に6例の早期胃癌症例を経験したが, そのうち5例は胃集団検診で見つけられたものであるのに対し, 自主的来院患者のうちからは1例にすぎないことが注目される。

各症例の自覚症状は, いずれも比較的少ない点からみて, 自主的来院患者に早期胃癌が少ないのは, 来院精査を受ける頃にはすでに進行癌に発展していることが非常に多いことが想像される。

かかる点から胃集団検診は早期胃癌を発見するのに最もよい方法であると考えられる。

## 31) 胃壁蜂窩織炎の1例

銚子市立病院 浦部 嘉夫

穿通性胃潰瘍兼腹膜炎の診断のもとに, 胃切除を行ない, 組織診断により, 胃壁蜂窩織炎と判明した1例を経験した。本症は原発性, 続発性に分類され, 病理学的には部分的, 全面的, 症状による分類は急性型, 慢性型に分けられる。私の症例は原発性, 全面的, 急性型である。その予後は部分的のものは近年化学療法の発達と, 積極的な治療法によつて, その治療成績はいちじるしく向上したが, 全面的のものは, まだその半数が死亡している。またその術前診断はきわめて困難で, 文献上でも術前に診断し得たものはきわめてまれである。私の症例は滲出液に菌を証明できなかつたので, 胃切除を行なわなかつたら, 診断はつけられなかつたと思われる。本例はきわめてまれで, 本邦では1911年から1966年までに, 私の症例を入れて, 55例である。